



KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

NO.43

神田日勝記念美術館だより



神田日勝《画室C》1967年 油彩、ベニヤ板 163.5×182.8cm 神田日勝記念美術館蔵



神田日勝記念美術館 館長

小林 潤

1993年のオープンから33年の時が流れ、この間多くの展覧会事業やイベント展開とそれに伴うアーティストの来町、そして何よりも歴代の館長諸氏の薫陶を受け、友の会の皆様の力強いご支援により、少なからず十勝鹿追の地に文化の風をそよがせ続けることができているものと自負している。

顧みればオープンまでの美術館建設に向けての若者の活動が住民・十勝管内外のファンを巻き込んだ運動になり、やがて人々の思いがうねりとなって町のマスタープランの中核施設として位置づけられた。運動の中核を担った人々は開館したこの施設を、「町立でもあり、町民立である」と言い放った。町民とファンの皆様の熱い思いを受け止めながらの今年度である。

前号でも触れたが、築33年を迎えている当館は各種設備の老朽化や雨漏り等が各所に出ており、これに対応する大規模改修の実施設計が進んでいる。現在のところ日勝作品の当館所蔵作品及び寄贈・寄託作品を収蔵したまま工事を進めることが可能と確認できた。これによって作品を別施設に移動せずに済み、伴う時間と労力・予算の計上はまぬがれそうであるが、いずれにしても屋根の葺き替えや冷暖房・電気系統・寒暖差に脆弱なサッシの改良工事等、館全体の工事のため令和8年4月から令和9年3月までの期間が長期休館となる。

休館は展示事業の停滞と共に来館希望者をお断りするなど他にも様々なリスクを伴うが、ともすれば日常の業務に追われ疎かになりがちな調査研究・教育普及等、学芸業務推進の好機ととらえ業務の遂行をしたいものと考えている。

今年度コレクション展の第一弾は「トリビュート神田日勝」と銘打ち、日勝と同時代の画家たちの作品と日勝の作品をオマージュして制作された現代作家の作品をピックアップして紹

一年を振り返って

介した。第二弾は「日勝をフィルターに通したら」と銘打ち、絵画ではないジャンルの主に現代作家作品に注目し、日勝になんらかの影響ないしは着想を得て制作されたものなどに光を当てての展示をした。

また企画展では、気鋭の写真家・美術作家クスマエリカによる「不在の気配・存在の痕跡」が広い年代の客層から注目を集め高い評価をいただいた。特別企画展では、当館所蔵の日勝作品との交換展として小川原脩記念美術館所蔵作品を「二人の歩んだ道」と銘打ち展示してきた。

馬の絵作品展などの子ども対象事業、未完の馬のいる風景プロジェクトも内容に変化を持たせながら一定の成果を収めている。

一方、昨年12月には先行研究を踏まえ現時点での最新の研究成果の反映を心掛けた当館所蔵の作品集を発刊した。

友の会事業では札幌フィルハーモニー管弦楽団員演奏による燕壑祭、クスマエリカのアーティストトークと第46回全日本リコーダーコンテスト高校生の部独奏で金賞（中でも最高賞の花村賞）受賞の鹿追高校2年生松崎紅愛氏と十勝リコーダー協会代表嶋本勇氏（ギター）演奏で好評を博した馬耕忌、小川原脩記念美術館学芸員沼田絵美氏によるギャラリートークと田中光俊氏によるギター演奏会で締めくくった日勝祭。いずれも多くのご入場を頂き盛会裏に終了しており、友の会各位の広範かつ弛みないご尽力に深謝申し上げたい。

この一年の活動の一端を述べたが、町内外また遠方からお越しいただいている皆様に紙面をお借りして感謝申し上げるとともに、休館となる新年度こそ気を引き締めて新たな年への準備を怠ることなく町の芸術の拠点施設としての運営を心掛けたい。

小川原脩記念美術館名誉館長・画家

徳丸 滋

足・頭》(1963年)に刺激され、横向き、後ろ向き、正面からの3人のうずくまる女性を描いた絵が全道展で奨励賞を受賞した。それを機に小川原脩に出会うことができた。家を訪ねた折、「君が徳丸君か、まあ一緒にやりましょうや」と優しい言葉をかけられた。以来35年間の長い付き合いとなった。小川原脩と車で札幌へ向かう途中、喜茂別町の農家の前に大きな木があり、頼み込んで一緒にスケッチをしたことがある。そのスケッチがタブローになったことを確かめてないが《森の入口の白い樹》(1979年、中心に太く描かれた樹)の原型ではないかと思っている。それ以後、何回かスケッチに同行したことがある。街から歩いてイワオヌブリを描きに出かけたことが印象深い。途中で自然に湧き出している炭酸水を飲んだりして、ハイキングのような楽しい時間だった。イワオヌブリの絵はたくさんある。

ぼくが長い間絵を描き続けてこられたのは、神田日勝と小川原脩との交流が非常に大きい。二人の絵の底に潜んでいるロマンティズムに惹かれ憧れている。



神田日勝と小川原脩

神田日勝とは約60年前、ぼくが全道展出品(1965年)を機に知り合い、約6年間の短い付き合いだったが、かなり濃密だったような気がする。当時、ぼくは帯広市に住んでいて北海道拓殖銀行に勤めていた。神田日勝の文にあったと思うが、絵を描いている農民を農民画家と言い、銀行員で絵を描いているのに何故銀行員画家と言われないのか、というくだりがあるが、あれはぼくのことだと思う。最初に訪問したときは冬で、国道のバス停留場まで馬橋で迎えに来てくれ、道の無いところを家まで颯爽と走り抜けた。また夏のある日、友と一緒に訪ねたことがある。その後再訪すると、その時の友とそっくりな絵がアトリエに掛かっていた。スケッチもしないで顔の印象を的確に把握する観察の鋭さ、描写の的確さに驚いた。3年程してぼくは倶知安支店に転勤となり帯広市を離れる前、弘文堂で個展をした。その折に絵を交換して別れを惜み、その後3年程は手紙で消息を伝え合った。最後に会ったのは、お盆に帯広へ帰った折アトリエを訪問した。原因の分からない高熱が出て、そのためかシュールな夢をたくさん見るという話をしたことが記憶に残っている。

ぼくが倶知安町に移転した直後(1967年)、神田日勝の《板・

第31回 燕壑祭

日時：2025年6月14日(土)18:00～19:30
会場：神田日勝記念美術館 展示室
内容：札幌フィルハーモニー管弦楽団メンバーによる演奏会
参加者数：90名

札幌フィルハーモニー管弦楽団メンバーによる演奏会が美術館展示室で行われました。ヴァイオリン、チェロ、ピアノによる情感あふれる演奏で出演者と来場者と共に開館を祝いました。



第33回 馬耕忌

日時：2025年8月24日(日)15:00～17:00
会場：神田日勝記念美術館 展示室
内容：第1部 出品作家と当館学芸員による座談会
幕間 十勝リコーダー協会 ミニ演奏会
第2部 クスマエリカ アーティストトーク
参加者数：90名

今回の馬耕忌は、企画展「神田日勝×クスマエリカ 不在の気配、存在の痕跡」にあわせて、出品作家であるクスマエリカ氏と当館学芸員による座談会、そしてアーティストトークを開催しました。

また本企画にあわせて、幕間では十勝リコーダー協会によるミニ演奏会も行いました。



第3回 「未完の馬」のいる風景プロジェクト

日程：2025年9月28日(日)
会場：千の公園(鹿追町ふるさと産業まつり会場)
参加者数：延べ約2,000名

第23回 日勝祭

日時：2025年12月7日(日)
第1部：15:30～16:30 小川原脩記念美術館沼田学芸員によるギャラリートーク
第2部：16:30～17:10 田中光俊ギター演奏
第3部：17:30～18:30 懇親会
会場：神田日勝記念美術館 展示室／ロビー
参加者数：50名

第1部では、当時開催中の特別企画展にあわせて小川原脩記念美術館の副館長(学芸員)の沼田絵美氏によるギャラリートークが行われ、出展作品について解説いただきました。第2部では、昨年に引き続きクラシックギタリスト田中光俊氏によるギター演奏が美術館展示室で行われました。第3部は美術館ロビーに会場を移し、出演の二人を囲んでの懇親会が行われました。参加者同士で親睦を図り、神田日勝の生誕を祝う会を終えました。



芸術鑑賞バスツアー

日程：2025年8月30日(土)
行先：北海道立近代美術館(札幌市)
参加者数：23名

「【近美コレクション】1945-2025 美術は何を記憶しているか」にて神田日勝の《室内風景》が展示される事にあわせ、バスツアーが組まれました。各々、思い思いの時間をすごしました。



第3回「未完の馬」のいる風景プロジェクトは、第44回鹿追町ふるさと産業まつり会場に隣接する美術館前庭で実施しました。鹿追高校の生徒や地元の若者たちの応援もあり、未完の馬の実物大パネルにぬり絵を張り合わせるコーナーには新しい未完の馬が誕生し、麦稈ロール滑り台や風船配り、「麦音」様謹製の未完の馬パン販売等に多くの親子連れが訪れ、いつもは美術館の展示室に鎮座している未完の馬が大活躍した一日でした。



第31回

馬の絵作品展

2025年10月7日(火)～14日(火)

鹿追町民ホール ホワイトホール

主催：神田日勝記念美術館 共催：鹿追町教育委員会・北海道新聞帯広支社
後援：北海道・北海道教育委員会・鹿追町・NHK帯広放送局・十勝造形サークル・
帯広市教育研究会図工美術部会・JR北海道・北海道電力ネットワーク(株)道東統括支店・
帯広信用金庫・北海道エンデュランス協会・神田日勝記念美術館友の会

く 審 査 講 評

本年、馬の絵作品展に道内外から三百点を超える出品がありました。低学年は馬の様子を奔放に表現し楽しさが溢れています。中学年は馬の優しい表情や周囲に気配りした作品が多くあります。高学年は複数の馬や背景を細かく観察し丁寧に彩色しています。中学生は表現の多様さが一段と進み、馬の表情・情景をより正確に描こうとする作品が多く観られます。本年の文部科学大臣賞は運搬車から降ろされる馬の表情・動きを捉え、構図・デザイン・彩色共にしっかり描き切りました。多くの素晴らしい作品に出会えとても感謝です。

絵の題材としては、日常生活で見ること、接することが少なくなった馬ですが「馬の絵作品展」という絶好の機会を活用して挑戦してほしいと思います。次年度も皆さんの作品を待っています。
(森戸春樹審査委員長)

第31回 馬の絵作品展 審査結果

入 賞		
◆文部科学大臣賞	羽幌町立羽幌中学校	3年 神 永 みそら
◆北海道知事賞	茨城県立下妻第一高等学校附属中学校(茨城県)	2年 宇 留 鷲 愛
◆北海道教育委員会教育長賞	守谷市立愛宕中学校	2年 三 澤 歩 実
◆鹿追町長賞	中標津町立中標津小学校	5年 澤 田 晴
◆鹿追町教育委員会教育長賞	鹿追町立鹿追小学校	4年 山 田 天 士
◆神田日勝記念美術館長賞	つくば市立谷田部東中学校(茨城県)	1年 北 川 翔 子
◆北海道新聞帯広支社長賞	帯広市立帯広第五中学校	2年 小 林 朱 莉
◆十勝造形サークル委員長賞	千歳市立千歳第二小学校	3年 坂 本 慶 悟
◆帯広市教育研究会図工美術部会長賞	今金町立今金中学校	1年 松 本 悠
◆JR北海道社長賞	中標津町立丸山小学校	4年 奥 友 理 奈
◆北海道電力ネットワーク(株)道東統括支店長賞	別海町立別海中央小学校	2年 福 岡 夢 絃
◆帯広信用金庫理事長賞	鹿追町立鹿追小学校	2年 清 水 遙 真
◆北海道エンデュランス協会賞	鹿追町立瓜幕小学校	6年 齋 藤 泉
◆【特別賞】ほのぼの賞	栗東市立金勝小学校(滋賀県)	2年 宮 林 晟 風
◆【特別賞】ほのぼの賞	札幌市立幌南小学校	1年 佐 藤 椋 太

文部科学大臣賞



羽幌町立羽幌中学校 3年 神永 みそら

馬の絵表彰式

日 時：2025年10月11日(土)
会 場：鹿追町民ホール
ミュージカルホール
参加人数：18名

十勝管内をはじめ道内外より多くの受賞者が来町され、受賞者は慣れない雰囲気緊張しつつも堂々とした面持ちで表彰を受けていました。受賞者のみなさんを見守るご家族の目はとても温かく、和やかな雰囲気の中で表彰式が行われました。



■学年別応募数

《小学校》

●1年生／24点 ●2年生／71点
●3年生／43点 ●4年生／52点
●5年生／31点 ●6年生／33点

《中学校》

●1年生／22点 ●2年生／22点 ●3年生／25点

■地域別応募数

十 勝／ 71点	胆 振／ 3点	留 萌／ 7点
石 狩／ 22点	渡 島／ 1点	釧 路／ 44点
空 知／ 1点	檜 山／ 1点	根 室／ 14点
後 志／ 5点	上 川／ 1点	

茨城県／ 30点	長野県／ 1点	愛媛県／ 8点
東京都／ 1点	滋賀県／ 111点	
山梨県／ 1点	兵庫県／ 1点	

応募点数
323点

コレクション展Ⅰ

「トリビュート神田日勝」

会期：2025年(令和7年)4月16日(水)～6月22日(日)
会場：神田日勝記念美術館展示室
出品作品数：神田日勝《ゴミ箱》(1961年)ほか館蔵品32点
入場者数：2,019名

帯広の平原社展を振り出しに画家としてのキャリアを築き始めた神田日勝。当時の十勝は若い画家を中心に熱気に包まれており、日勝も刺激を受けたことは想像に難くありません。他方で、若くして全道展で道知事賞を獲った日勝は十勝の画家たちの憧れの的であり、日勝は時に十勝を引っ張る存在でもありました。

本展では当館の所蔵品のなかから、神田日勝の作品、および日勝とともに画業の研鑽に励んできた同時代の十勝の画家たちの作品、さらに日勝をリスペクト、あるいはオマージュして制作された現代作家の作品をピックアップして紹介し、日勝を中心に広がる芸術世界をご観いただきました。

(本展担当者：杉本圭吾)

コレクション展Ⅱ

「日勝をフィルターに通したら」

会期：2025年(令和7年)10月3日(金)～11月30日(日)
会場：神田日勝記念美術館展示室
出品作品数：神田日勝《開拓の馬》(1966年)ほか館蔵品32点
入場者数：1,638名

所蔵作品の中から、神田日勝の代表作に加え、岡田敦、浅井美紀による写真作品や吉田傑による立体造形作品を展示しました。これらはいずれも当館で過去に展示されたことがあるか、コラボレーション展示をきっかけに制作されたものです。

現代アーティストの手による作品の時代背景やテーマ、造形的な特徴を「フィルター」として捉え、神田日勝の作品を見直し、見比べることで新たな神田日勝像を発見していただく展示として企画しました。

昨年度寄贈された、岡田敦による「The Horses of Yururi Island」シリーズの初お披露目の機会でもありました。

(本展担当者：佐藤拓実)

企画展

「神田日勝×クスミエリカ 不在の気配、存在の痕跡」

会期：2025年(令和7年)6月25日(水)～9月28日(日)
会場：神田日勝記念美術館展示室
出品作品数：クスミエリカ《跡形の馬》(2025年)ほか作品17点、神田日勝《ヘイと人》(1969年)ほか作品15点
入場者数：3,891名

本展は、自身で撮影した写真のみを素材にデジタルコラージュ作品を制作する北海道札幌市出身・在住の現代作家、クスミエリカ(1982-)と、神田日勝の絵画とのコラボレーション展覧会として開催しました。

クスミは写真をデジタル技術によって加工することによって、誰もが目にする現実の風景を再構成し、非現実の世界が現実の延長にあることを表現しています。日勝もまた、自身の生活に根差した身近なモチーフを題材としつつ、画家の脳内で再構成した独自のリアリズムを絵画で表現しており、両者の制作活動は相通ずるものがあります。

本展では、当館所蔵の《画室B》、《ヘイと人》、《馬(絶筆・未完)》など、日勝の絵画が並ぶ空間で、メインビジュアルにも採用された《跡形の馬》をはじめ、展覧会に合わせて制作された5点の新作を含むクスミの作品を、吊るし、床置きなど、大胆な手法で展示し、ご覧いただきました。神田日勝とは異なる時代に生きるクスミの手によって、日勝の痕跡と記憶を辿っていくというコンセプトのもと、神田日勝という「存在」について、展示空間全体を用いて迫っていく展覧会となりました。

(本展担当者：杉本圭吾)



主催：神田日勝記念美術館展覧会事業実行委員会
共催：神田日勝記念美術館、
神田日勝記念美術館友の会
後援：北海道新聞帯広支社、
十勝毎日新聞社、
NHK帯広放送局、
JAGA、
おびひろ市民ラジオ FM WING

関連イベント：
＊第33回馬耕忌 アーティスト・トーク
日時：8月24日(日) 15:00～17:00
会場：本展会場 参加者数：90名



令和7年度 特別企画展

会期：2025年(令和7年)12月3日(水)～
2026年(令和8年)3月29日(日)
会場：神田日勝記念美術館展示室

主催：神田日勝記念美術館
後援：鹿追町、鹿追町教育委員会、神田日勝記念美術館友の会、
鹿追町文化連盟、北海道新聞帯広支社、十勝毎日新聞社、
NHK帯広放送局、JAGA、おびひろ市民ラジオ FM WING

出品作品数：小川原脩作品19点
神田日勝作品18点
入場者数：1,301名

二人の 歩んだ道

神田日勝記念美術館
×
小川原脩記念美術館
所蔵作品交換展

本展は北海道倶知安町出身の画家（1911-2002）の画業を顕彰する小川原脩記念美術館との所蔵作品交換展として開催されました。神田日勝（1937-1970）と小川原脩との共通項は、「全道展の出品画家である」こと、「地方の山村に根差して絵画活動を続けた」こと、そして「画風が目まぐるしく変化した」ことが挙げられます。これらを結び目に、両者の作品を同じ空間に並べることによって、戦後の激動の時代のなか、芸術を通じて自己の確立を目指した二人の歩んだ画業をご覧いただきました。

章構成は、小川原脩が「第1章 小川原脩の東京時代～前衛絵画から戦時下～」 「第2章 小川原脩の帰郷後～北海道、そして考古学～」 「第3章 小川原脩と動物～馬から犬、白鳥へ～」 「第4章 小川原脩の旅～記憶の浄化～」の4章構成。神田日勝が「第5章 神田日勝の画業の始まり～戦後社会派リアリズム～」 「第6章 神田日勝の画業の展開～色彩への渴望と情報化社会への眼～」 「第7章 神田日勝と画壇の流行～アンフォルメル～」の3章構成。両者の画業についての総論である「第8章 二人の歩んだ道」と、風景画から比較を試みた「第9章 小川原脩の倶知安、神田日勝の十勝」という全9章からなります。基本的には年代記的に並べて両者の画風変遷を辿りつつ作品を紹介しました。

前半構成では小川原脩に注目しました。1911年に当時の倶知安村で生まれた小川原は、旧制倶知安中学を卒業後に東京美術学校に進学。東京では当時日本で紹介されたエルンストらの前衛絵画に衝撃を受け、その普及に寄与した福沢一郎との出会いをきっかけにシュルレアリスムに傾倒していきます。この頃の作品にはエルンストの影響を強く受けた《植物園》（1937年）やマグリットを思わせるデペイズマン手法を用いた《造園地帯》（1938年）などがあります。しかし、戦時色が濃くなると小川原も前衛からは距離を置き、已むに已まれず従軍画家として戦争画を描く道を選ぶのです。病気により除隊した小川原は、家族と共に疎開先の郷里・倶知安で終戦を迎えます。戦後、画壇でも戦争協力者への責任追及が行われましたが、小川原は東京には戻らず、自己弁護をすることもなく、倶知安で「沈黙」します。この頃から関心は「北海道的なもの」へ

移り、《宗谷海峡の漁師》（1953年）など、素朴さ、力強さ、土俗性といったものをデフォルメで表現しています。また、近隣の余市町で続縄文時代の岩面壁画遺跡・フゴッペ洞窟が発見され話題となると考古学に関心を寄せ、《シャーマニズムの祭典》（1959年）では古代文字や記号を思わせる土着的で呪術的なモチーフが描かれています。

1970年代になると、小川原は馬や犬、白鳥などの動物を描くようになります。それは「ひとつは、動物たちの姿に人間社会の縮図を投影するということであり、いまひとつは、動物たちの姿に彼個人の長い歩みと信条、さらに人間社会に対する彼の在り方を託して表現しようとするもの*1」でした。長い沈黙を経て、彼は少しずつ自らの表現で語り始めるのです。描かれた動物に共通するテーマは「個と群れ」です。個は群れからの疎外を、群れは群れることの攻撃性を表現しており、《群化社会B》（1974年）や《大白鳥》（1978年）に如実に表れています。

1979年、小川原は旅行で中国・桂林を訪れます。景勝地で川下りに参加した画家は、かつて従軍画家として中国大陆を駆けた体験が、緩やかな時間の中で赦されるような感覚を覚えたと言います。これをきっかけに毎年のようにアジアを訪れ、旅の先々で目の前の風物への率直な感動を抱いた小川原は、明るい色彩、余白を持たせた空間表現、そして油絵具を薄く塗り重ねる技法など、画風にもその心境が反映されます。チベット旅行を経ると表現はより洗練され、《チベット讃歌》（1982年）のように無駄なものを削ぎ落した、山水画のような作風へと至ります。

後半構成では神田日勝に注目しました。画業初期は、廃棄物や家畜の死骸などの社会から疎外されるものや、労働者や農耕馬といった身近なモチーフが画題に選ばれ、茶褐色の統一された色調で描かれています。《飯場の風景》（1963年）では、冬山造材の休憩所で休む男たちの遅い肉体やゴツゴツした手足が労働の厳しさを想起させ、《ゴミ箱》（1961年）のドラム缶や空き缶からは、大量消費社会の裏で生じる廃棄物を想起させ、当時日本で流行していた「戦後社会派リアリズム」の影響も窺えます。

画業中期に入ると、《画室A》（1966年）を始めとして、画面全体が原色で溢れ、画材や日用品が無秩序に並べられた作品が登場します。日勝は当時アトリエを持たなかったため、モチーフは美術雑誌に掲載され



た写真などに典拠を持つと考えられ、画材のラベルなどからは当時アメリカで流行していたポップアートの影響も窺えます。同時期の作品には、新聞やポスターといった流行文化を同わせるモチーフも登場します。《ヘイと人》（1969年）では、医薬品や車といった利便性を謳う広告や享乐的な女性の裸体のポスターが見える一方、それらに覆い隠されるように、開高健のルポ小説『ベトナム戦記』の題字と書き文字が表現されていることも見過ごせません。

画業後期に入ると、鮮やかな色彩はそのままに、画面全体が奔放な筆致と分厚い絵具の盛り上がりで埋め尽くされます。原色の氾濫、太く勢いのある輪郭線、そしてデフォルメされた人物や牛馬の描写がこの頃の特徴です。こうした描法には、1950年代後半にフランスから日本に流入した「アンフォルメル」と呼ばれる抽象表現主義運動の影響が見て取れます。当時の日勝は、日本の画壇全体を席卷するこの流行に触れて、一度画風に取り入れることで消化しようとしたようです。

以上を踏まえて第8章では、改めて両者の画業の変遷について注目しました。小川原脩の画業は、前衛絵画に始まるも、戦中に従軍画家としての咎を背負い、戦後は郷里で様々な表現を取り入れながら画家としての自己の在り方を模索し続けた試みであり、東洋との接触を経て晩年の浄化されたような作風へと昇華していく過程でした。画家曰く「今の自分はそういう失敗、道を踏みはずした過程を通してあるのだから*2」と、積み重ねてきた過去の経験や過程をすべて受け入れ、群れからは距離を置きつつも確実に〈小川原流〉の道を歩んできたのです。

他方、神田日勝の画業は、病魔によって途絶します。主なきアトリエに遺されていた作品《馬（絶筆・未完）》（1970年）の存在が特に、彼自身の未完の生涯と重ねられ、作家の没後〈夭折の農民画家〉神話が殊更に喧伝されることとなりました。画業中期のポップアート風、後期のアンフォルメル風を引き合いに、『迷走の末に画家が辿り着いたのは馬を克明に描く原点回帰だった』といった言説が長らく支配的でしたが、

遺されたスケッチブック等から、最後まで飽くなき挑戦と試行錯誤の連続だったことが判明しています。

また小川原は、犬や白鳥といった動物たちの姿に人間社会の構図を投影することで社会における画家自身の在り方を表現しようと試み、日勝もまた農業に従事する傍ら身近な題材をもとに絵を描き続けることで、没個性化していく人間社会へ警鐘を鳴らしました。二人の歩んだ道とは、絵画表現によって人間や社会の在り方を絶えず追求する道だったのです。

（本展担当者：杉本 圭吾）

*1 新明英仁『小川原脩——通かなるイマージュ』、北海道新聞社（ミュージウム新書）、1995年。
*2 矢吹俊男「対話」、小川原脩記念美術館『自伝風な画集003—私のなかの原風景』、2008年。

関連イベント

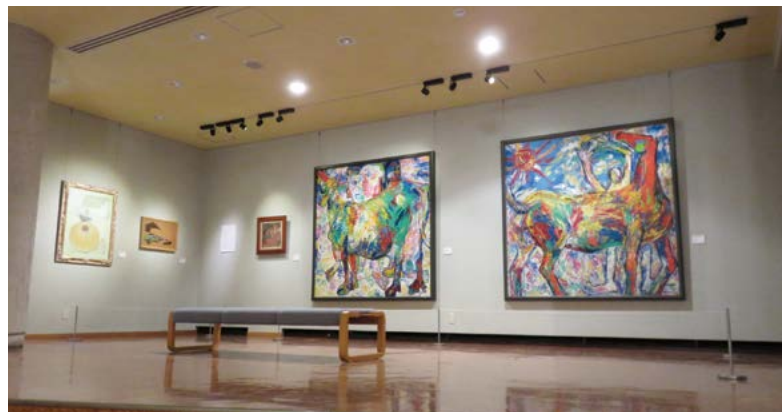
■ギャラリートーク

- 第1回 1月10日(土) 参加者数：1名
- 第2回 2月7日(土) 参加者数：5名

■第23回 日勝祭特別ギャラリートーク

日時：12月7日(日)
講師：沼田絵美氏（小川原脩記念美術館副館長・学芸員）
会場：神田日勝記念美術館展示室
参加者数：50名

特別ギャラリー トークの様子



馬耕忌

第33回

今回の馬耕忌は「神田日勝×ク
スミエリカ 不在の気配、存在の
痕跡」展にあわせて、出品作家で
あるクスミエリカ氏による特別
ギャラリートークを開催しまし
た。開催に先立ち、クスミ氏と
担当学芸員との座談会がおこな
われました。

日時:2025年(令和7年)8月24日(日)
15:00~16:00
会場:神田日勝記念美術館 展示室
参加者数:90名

第一部座談会 抄録

講師：クスミエリカ 氏

司会：杉本圭吾 (当館学芸員)



□ 作家略歴 □

クスミエリカ 美術作家／フォトグラファー
1982年、北海道札幌市生まれ。2005年、
フリーランスのカメラマンとして活動を始
め、現在はクリエイティブシェアオフィス
「tab」に所属しながら、フォトグラファー、
美術作家など、多方面で活動。美術作家と
しては、自身で撮影した写真のみを用い、デ
ジタル処理を施した「デジタルコラージュ」
作品を制作している。2020年、第48回札幌市文化奨励賞、第30回道銀芸術文
化奨励賞受賞。主な展覧会への出品として、「VOCA展2019」（上野の森美術
館/2019年）、「未明の旅」（GALLERY SCENA[東京]/2023年）、「私たちは積
層で出来ている」（GALLERY MoNMA/2024年）、「温故知新」（SanHo Art
Lab[台湾・台南市]/2024年）など。

杉本 始めに、クスミさんご本人について掘り下げていきたいと思いま
す。もともとは美術作家ではなく別のご職業もお持ちですよね？

クスミ カメラマン、フォトグラファーですね。広告で使ったり記録と
して残したりするための写真を撮っています。

杉本 そのほか札幌国際芸術祭の公式カメラマンや、札幌芸術の森美術
館の展覧会の記録など、いろいろなお仕事をされていますけれど、そこ
から美術作家の道に進まれるきっかけは何だったのでしょうか？

クスミ 私が写真を始めた頃はまだフィルムカメラの時代でしたが、そ
の後デジタルカメラに切り替わって、カメラマン自ら写真をきれいに補
正する技術が必要になってきました。ソフトの使い方を覚えるため自分の
写真に手を加えていくうちに「これ、面白いな」と感じたことが一番
のきっかけでした。そもそも職業にしたいと考えてみましたが無我
夢中にやっていくうちに美術作家が職業になっていきました。

杉本 クスミさんはご自身の作品の技法を「デジタルコラージュ」と呼
んでいます。来館者から「どうやって作っているのですか？」とよく訊
かれるのですが「元々は写真です」とお答えするととても驚かれます。
そもそも「デジタルコラージュ」とは何なのでしょう？

クスミ いわゆる「コラージュ」は写真や雑誌などいろいろな素材を切
り貼りして平面上で組み合わせる、フランスで始まった美術の表現方法
の一種です。私は編集の範疇をなるべく超えないように写真に手を加え
て、自分の写真だけを組み合わせることを心掛けてきました。
それをどう言えば一番伝わるのかと考え、「コラージュ」、かつすべてデ
ジタルなので、「デジタルコラージュ」や、「デジタルフォトコラージュ」
という言い方をするようになりました。

杉本 どうやって作品を作り上げているのですか？

クスミ まずはデジタルカメラで撮影して、撮影したものをパソコンに
取り込み、昔でいうフィルムを現像する作業を行います。その後、写真
をパソコンの中で選んで、必要な部分だけを切り出して、そこから組み
あわせていく、というように作っています。



杉本 切り取る部分や配置を考えてから組み合わせることが多いので
しょうか？

クスミ 組み合わせを決めては始めることもありますし、作品のテーマ
から考えていくパターンもあります。

杉本 だいたい一作品仕上げるのにどのくらいの時間をかけるのです
か？

クスミ かかるものだと一、二カ月、はやいものだと三日くらい、遅い
と半年以上かかります。考えている時間の方が長いので、作業自体はそ
こまで長くないものもあります。撮る段階から数えると、もっとかかっ
ています。



杉本 ここからは、どうして鹿追で展示をすることになったのか、お話
を伺っていきます。もともとクスミさんの展示は私がずっと温めていた
企画で、人づてにお声掛けしたのですが、最初にその話を聞いた時どう
思われましたか？

クスミ まず、「私で務まるだろうか」と思いました。神田日勝は名前
を知らない者がいない、レジェンドと言ってもいい画家です。でも、
そのあとすぐ「すごく楽しそう、やりがいがありそう、やってみたい
な」と思いまして、「喜んでお引き受けします」とお答えした覚えがあ
ります。

杉本 北海道で活動されている方なら一度は神田日勝の名前を耳にする
と思うのですが、札幌市出身のクスミさんが神田日勝に初めて触れ
たのはいつごろですか？

クスミ 美術の資料集だったと思います。その中で絵を見てすごく印象
的だったのが神田日勝だったのですよね。その後、北海道立近代美術館
で展示されていた《室内風景》（1970年）が、初めて拝見した本物の
絵でした。当時はまだ美術を志す前でしたが、10代の多感な時期で、「す
ごい絵だ」と思って動けなくなるくらい衝撃がありました。

杉本 当館としては、現役の作家とコラボレーションするとなれば、単
なる貸館じゃない展示、鹿追町や神田日勝記念美術館じゃないとできな

い展覧会をやらなければいけないという想いがあります。クスミさんは
実は鹿追とはご縁があって、過去に瓜幕のライディングパークを取材さ
れて、そこで撮った写真をご自分の作品に取り入れたことがあったので
すよね。

クスミ 十勝の写真を撮りにあちこち行った時に然別湖のほうから鹿追
にきました。山を下りたら視界がひらけて、「めちゃくちゃきれいなと
ころに出た！」と感動したのを覚えています。扇ヶ原展望台の景色も
「なんてきれいなんだろう！」と思って。

杉本 今回は制作にあたってクスミさんが神田日勝についてすごく考え
て、学んで下さったのですけれども、神田日勝に対しての印象は変わ
りましたか？

クスミ 大きく変わりました。最初は「素晴らしい作品を作った伝説の
方」という印象でした。今回、神田日勝さんご本人や、周囲の方が日勝
さんについて書いた文章を読ませていただいて、印象が大きく変わ
りました。本当に素敵で魅力的な方だなと敬服しました。とても人間らしい
部分をお持ちで、「かつて北海道の地で、自分と同じ人間として懸命に
生きた方だったのだ」と感じ、その存在にしっかり向き合うことができ
ました。

杉本 神田日勝はいろいろな表情を持っているところが魅力的な画家だ
と思います。作風もそれぞれの時期で変わっていますが、クスミさんが
一番好きな神田日勝の作品はどれですか？

クスミ 事前に訊かれていたのですが、すごく迷って……。甲乙つけが
たいじゃないですか。どの作品も違った魅力があって選べないのですけ
れど、どれかひとつというなら《馬（絶筆・未完）》（1970年）です
かね。あの馬の優しい顔がいいなと思っています。

杉本 クスミさんは写真やデジタルコラージュの人で、かたや神田日勝
は油絵の人です。今回のコラボレーションでは、違ったジャンルの作品
をどこに着目して並べればよいのか考えて、ふたりの共通点として現実
に対する捉え方がとても似ている気がしています。

神田日勝は農業の傍ら身近なものを描いた画家と言われていますが、
描かれた結果として残っている絵は、見聞きしたものを脳内で再構成し
てアウトプットしているところがあります。こういう表現が正しいかど
うかわかりませんが、日勝の作品はある種の「非現実」といえるのでは
ないかと。一方クスミさんの場合は現実の写真を機械に取り込んで自由
に並べることで、現実にはない風景ができています。そのような「非現実」
の表現の仕方が似ているのかなと思いました。

その中で、クスミさんご自身が日勝と似ていると思う点はありますか？
答えづらいかもしれませんが（笑）。

クスミ 大変恐縮ではありますが、親近感を覚える言葉があり、「こん
なふうに表現するんだ、かつこいいな」と、制作の中でもシンパシーを
感じていました。思考の過程では共通する部分はあるのかもしれないで
すが、私と出力する方向性は違うのですよね。時代も性別も生い立ちも
違う中で、共感する部分も違いもあるのが面白いなと思っていました。
杉本 クスミさんの作品は、現実をコラージュすることで「非現実」を
表現しているそうですが、ご自身では現実をどのようなものとして捉え
ているのでしょうか？

クスミ 現実とは、日々の日常のことだと思います。良くも悪くも、い
ろいろなことに慣れていってしまい、楽しいこともあれば辛いこと、悲
しいこともあって過ぎていくものだと思います。

作品を作る時にはどうしても自分自身のことも表に出さねばならない
ので、自分との対話というか、その時の自分の気持ちをすごく考えるの
ですけれども、私は現実には希望を持ちたいと思い作品を作っています。
実際にいろいろな方の作品を見て、現実には希望を持てた経験もこれまで
たくさんありました。自分も作品を見てくださった方にとって、そのよ
うな存在でありたいと思いますし、作品を作ることで、自分自身も救わ
れています。

杉本 クスミさんの作品は前向きな作品なのですね。

クスミ 表現はあまり前向きに見えないかもしれませんが……。私

は「メメントモリ」という考え方が好きです。「死を想え」という意味
の警句で、美術作品でわざと骸骨などを描いて見せることで死を意識さ
せ、限りある生をよりよく生きようというものです。

なぜそのようなことに共感を覚えたかということ、これまで家族の死が
自分の中でとても多かった人生だからだと思います。二十歳のころに弟
が、三十歳のころに母が、四十歳のころに父が病気で亡くなり、ずっと
病気や死と向かい合ってきて、「病気になるってなんだろう」「生きるっ
てなんだろう」ということをずっと考えてきました。いままでは、あま
り生い立ちのことを言うてきませんでしたが、人となりを知ってもら
うと作品の背景への理解が深まりますし、決してマイナスには働かないの
だと思って、最近は少しずつ
言うようにしています。

杉本 実はそのような経験が

作品に反映されていて、いろ
いろなことに向きあったから
こそ出てくる作品なのかもしれ
ないですね。

クスミ そうかもしれないで
すね。懸命に生きることを目
の当たりにすると、「生きるっ
てすごいことなんだな」と思
います。

杉本 来館者からは「今回の展覧会名や作品タイトルが難しい」とい
うご感想をもらうこともあります（笑）。クスミさんをクスミさんたらし
めているものは言語感覚にも現れているのかなと思うのですが、展覧会
名や作品名は、敢えて難解にしようとしているんですか？それともご自
身が今まで見聞きしてきた先人たちの創作物の影響ですか？

クスミ わたしは実家が本屋で、本をだいふ読み込んだので書籍か
らの影響もありますし、ゲームやアニメが大好きな世代ですから、影響
を受けた言葉選びはしていると思います。ただ、難解にしようとは思っ
ていないですね。どうにか伝わるようにしたい。そして、ちょっとかつ
こいい言い回しにしたい（笑）。そういう気持ちで言葉を選んでいるこ
とは多いかもしれないですね。

杉本 例えば今回のメインビジュアルになった《跡形の馬》という作品
のタイトルは、最初はひらがなだったのを「漢字で書いたほうがクスミ
さんっぽいと思います」と、私が余計な助言をしました（笑）。

クスミ 杉本さんがすごく私の感覚をわかってくださっていたから
「じゃあ漢字にしましょう」と（笑）。やはり漢字だと全然印象が違うと
思います。

杉本 最後に、現代美術にあまり馴染みのない方に向けて、ご自分の作
品をどう見てほしいか、楽しみ方があればお聞きしたいのですが。

クスミ 「難しいことは考えずに好きに見てもらえれば」と、アーティ
ストの方はよくおっしゃいますけど、それは難しいと思います。私が意
識してもらえたら嬉しいと思っているのは、ご覧になっているみなさん
と、作品の中に入っている写真は地続きであるということです。

今回の作品には、鹿追に住んでいらっしゃる方は見覚えがあるかもし
れない景色も入っています。日勝さんが使っていた机や本、ペインティ
ングナイフ、この会場の中に置いているものもたくさん入っています。
だから、作品がみなさんと地続きであること、それがいまここに繋がっ
ていることを意識して見てもらえると、現実の見方をちょっと広げられ
るのではないかな、と。そんな風に思ってもらえたら、作った甲斐があ
ると思います。

杉本 特に今回の作品は、今はなくなってしまった懐かしい風景も混
ざっていますので、後でじっくりご覧いただければと思っています。
それではお時間が来ましたので、以上を持ちまして座談会を終わりたい
と思います。クスミさん、ありがとうございました。

クスミ ありがとうございます。

※座談会の全文は4/1以降、当館HPで公開します。

新しい所蔵作品集ができました！

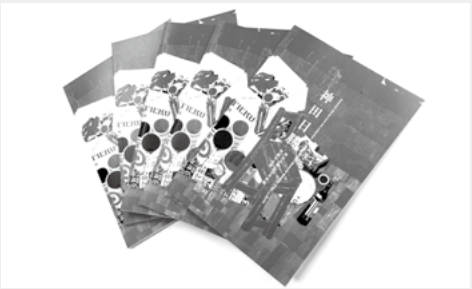
2025年12月に『神田日勝記念美術館 所蔵作品集』が刊行されました。

表紙には、ショッキングピンクが印象的な《画室C》(1967年)をあしらい、神田日勝に対して抱かれがちだった暗く重いイメージを軽やかに更新することを狙いました。

本文では、画業を4つの時期に分け、所蔵作品の中から選りすぐりの66点をカラーで収録。代表作に加えて風景画や素描も織り交ぜながら、制作の変遷と広がりわかりやすく紹介しています。

さらに、書きおろしの論考を掲載し、最新の研究成果にも触れられる内容となっています。人物像をより身近に感じられるよう、本人が残したことばや略年譜も収録しました。

全63ページ、B5判。価格は2,500円(税込)。神田日勝記念美術館のほか、オンラインショップでも販売しています。

大規模改修に伴う
臨時休館のお知らせ

神田日勝記念美術館は平成5年の開館から32年が経過し、施設の老朽化が進んでおります。このたび大規模な改修工事が行われることから、以下のとおり休館を予定しています。各詳細な情報についてはホームページなどで発信しますのでご確認ください。ご不便をおかけしますがご理解いただきますようお願いします。

休館期間	令和8年4月から 令和9年3月まで
------	----------------------

次のイベントは休館中も開催を予定しています

- 馬耕忌(令和8年8月)
- 日勝祭(令和8年12月)
- 芸術鑑賞バスツアー
- アート・キッズ・クラブ
- 馬の絵作品展

学校連携実績

- 鹿追町立通明小学校 「図工科見学」
2025年6月27日(金) 小学生14名、引率6名 合計20名
- 札幌光星中学校 「サマースクール」
2025年9月18日(木) 中学2年生17名、引率4名 合計21名
- 芽室町立芽室西中学校 「美術科 鑑賞授業」
2025年10月16日(水)、10月17日(木) / 2025年11月12日(水)、11月13日(木)
中学生93名、引率8名 合計101名(四日間)
- 鹿追町立鹿追小学校 「社会科 郷土学習」
2025年11月18日(火) 小学4年生14名、引率2名 合計16名

2026年、当館の作品を他館に貸出いたします！

■小川原脩記念美術館

「神田日勝記念美術館×小川原脩記念美術館 二人の歩んだ道」

2026年4月11日(土)～7月12日(日)

本展は、小川原脩記念美術館と神田日勝記念美術館との所蔵作品交換展です。神田日勝は、生涯を通じて、戦後社会派リアリズムや、ポップアートを思わせる色彩の氾濫、そしてアンフォルメルなど、自らの画風を最後まで模索し続けました。小川原脩(1911-2002)の画業はまた、戦前のシュルレアリズムへの傾倒、戦後に入っの北海道的な題材への取り組みや、縄文文化・シャーマニズムへの接近、そして動物をテーマにした作品を経て、晩年のチベット・インドへの接近と、生涯にわたって様々な画風の変遷をたどりました。

農業に従事する傍ら身近な題材をもとに絵を描き続けることで、没個性化していく人間社会へ警鐘を鳴らした神田日勝と、犬や白鳥といった動物たちの姿に人間社会の構図を投影することで社会における在り方を表現しようと試みた小川原脩。戦後の激動の時代にあって、芸術を通じて自己の確立を目指した二人の画家。両者がそれぞれ歩んだ画業をご覧ください展覧会です。

■江別市セラミックアートセンター

「神田日勝展」

2026年7月18日(土)～9月6日(日)

古くは明治から始まった江別市のれんが製造は、北海道炭鉱鉄道株式会社のれんが工場の設置を機に製造の中心を野幌地域に移し、以降北海道最大のれんが生産地として今に至っています。2004年には北海道遺産にも認定され、現在も江別を代表する産業であり文化であるれんがを中心としたまちづくりの中核施設として1994年に江別市セラミックアートセンターは開館しました。

施設は主に展示室、陶芸工房、研修施設の機能を持ち、やきもの産業と陶芸文化の発展を目指して、これまで様々な催しが行われてきました。展覧会企画としては、これまでは主にやきものをテーマとした企画展をおこなってきましたが、開館から30年を経て新たな客層へPRする試みとして、近現代絵画作品の展覧会を催し、その第一弾として神田日勝展を開催するものです。

■札幌芸術の森美術館

「札幌芸術の森開園40周年記念 Flowering Garden『花と獣 いろとかたち』」

2026年7月11日(土)～9月27日(日)

草花の彩り、四季のうつろいを絵に留めて、動物の凛とした佇まいやあじけないしぐさを彫刻する――人はその命の輝きに魅せられ、古来、創造の源泉としてきました。美術家たちの眼差しを通じて描き、彫り出された動植物の姿に、永きに渡って繋がれてきた生命の尊さや重さを見出すこともできるでしょう。

本展では動植物を主題とした絵画、彫刻、写真などを、美術館展示室のみならず、札幌芸術の森園内屋外スペースにも展示します。それぞれの作家が生命と向き合い、「いろ」や「かたち」で表現した花と獣の世界を自然豊かな芸術の森をめぐりながら、お楽しみください。当館所蔵の岡田敦作品(写真7点、映像1点)が貸出される予定です。

■感想ノートより

拓殖バスさんとのコラボで、こちらの美術館を訪れる事ができました。超有名なお馬さんの…丁度バスポート写真の様な上半身の画。間近で見たら、何とも素晴らしい「馬」の絵だった。残りはどう描いてくれるのか、と、モデルも楽しみにしていた事だろう。山なみは…と、山もどう描いてくれるのか、今も心待ちにしている事だろう。完成したら…大喜びで、山をも動くのか、涙を流し川がうるおうのか…大変な作品の数々だ。たくさんのお思いを込めて…(2025年4月23日)

川崎市から来ました。北海道出身なのに、恥ずかしながら神田日勝さんを知らなかったけど、展示を見るなかで彼の感性にひかれていきました。また来ます！(2025年4月29日 K)

お母さんが行きたいと言って帯広から来ました。色んな絵があって、おもしろかったです。(2025年5月3日 H)

テレビでお知らせを見て来ました。未完の馬を初めて生で見て、涙が出てきました。ペニヤ板に下書きの線も見えて、塗りかけのかすれもあって涙が出ました。(2025年5月10日)

受け取めきれない力を感じた。私も私で生きる。(2025年5月18日 S)

小学生の時、テレビで神田日勝を見てとても強い感情が芽生えました。それから絵の道を私も進んで、今、私は画家です。アメリカNYの地で彼からもらった熱い想いを感じずにはいられません。彼の馬が私の人生をつくり、私の絵が他の人々に影響を与えているのだと思います。このような作品を今も保ってくれてありがとうございます。美術館、この作品を守っている全ての人々に感謝しています。(2025年5月22日)

何度も来ています。私も戦後開拓者の娘で親は東京から来ました。大きな木のかぶを片付ける姿を思います。日勝さんの絵を見ると涙がこぼれます。親の苦労をおもいます。(三食は食べられず)日勝さんの強い意志を感じ、力付けられます。ありがとうございます。(2025年5月23日)

横浜よりわざわざここに来ました。自分と5才違いの画家の生き様を見て、大きな感動を頂きました。もっと知られて良い方です。才能にあふれた画家でしたね。(日付不明 K)

始めて然別湖を目指しバスに乗り…途中でこここのバス停に気づき、あっ!!ここ一度来たかった美術館だ!!と本日、帯広に向かうバスを降りました。次のバスは3時間後～それでも日勝氏の絵と生き方に触れられてよかったのひと言です。こういうノート、若い頃、あちこちで書いたなあとノートの皆さんの文にも★です。(2025年5月31日 S)

クシミ展の初日です。北海道バイクツーリングで美術館、博物館を巡っています。北海道の風景が大好きです。クシミさんの鹿追の風景写真と、日勝さんのボブラ並木やサイロを描いた風景画(〇〇の農場)等や静物画のコラボ展を是非お願いします。今回のコラボ展、学芸員さんの企画がすばらしいと思いました。「コラージュ」技法を使った作品の対比がくみとれました。(2025年6月25日)

※ノートにお名前を記載いただいている場合はイニシャルで表記しました。 ※SNSアカウント名は省略し、絵文字は「★」で表記しました。
※誤表記と思われる部分も原文のまま表記しました。

出前講座・講演会実績等

上幌内寿クラブ講演会
「北の大地「鹿追」と神田日勝」

日時：2025年11月7日(金)
13:30～15:30
会場：上幌内高齢者交流館(鹿追町内)
講師：小林 潤(当館館長)



全国美術館会議学芸員研修会
「個人美術館における作家顕彰の取り組みー
神田日勝記念美術館の二つの事例」

日時：2026年2月6日(木)
14:55～15:35
会場：鎌倉芸術館(神奈川県鎌倉市)
講師：杉本圭吾(当館学芸員)

メディア情報
(抜粋)

テレビ
テレビ東京『新美の巨人たち』
「未完の絶筆・神田日勝「馬」×八木亜希子」 放送日：2025年5月17日 22:00～22:30
NHK総合『ほっとニュースぐるっと道東！』
特集「鹿追町の神田日勝記念美術館の企画展を紹介」 放送日：2025年9月11日 18:40～19:00

雑誌等
『感じる 表す 美術』
(中学校用教材、2025年版 編集・発行：浜島書店編集部 発行日：2024年12月10日 印刷日：2025年3月1日)
「「美しき馬」カレンダー 2026」『和楽』
第25巻第6号(2025-2026年12・1月号特別付録②) 編集・発行：小学館 発行日：2025年11月1日

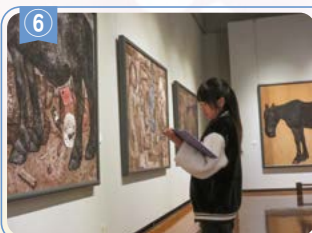
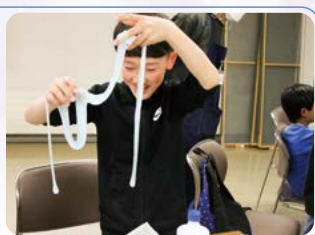
新聞記事
郷原 信之『日本・韓国 美術家たちの往還(下) 創造力は国境をこえて』
『日本経済新聞』 発行日：2025年7月20日
畑中 謙一郎『馬と生きる 歴史編2 十勝に生きた天逝の画家 神田日勝 未完の絶筆 余白が放つ美』
『朝日新聞』北海道版 発行日：2026年1月3日

アート・キッズ・クラブ

●会場：鹿追町民ホール(第2回・第5回除く)

鹿追町内の小学生を対象として、作品鑑賞と工作教室を行っています。
子どもたちからは、創意工夫する喜びや楽しさを感じる様子が伺えました。

- ①「スライム作りを楽しもう！」 ●2025年5月10日(土) 参加人数：37名
- ②「子ども芸術鑑賞ツアー」 ●2025年7月30日(水) 参加人数：26名 見学施設：帯広百年記念館、北海道立帯広美術館(帯広市)
- ③「転写でオリジナルグッズを作ろう！」 ●2025年8月23日(土) 参加人数：20名 講師：クスメエリカ氏
- ④「絵が動く！回転のぞき絵を作ろう！」 ●2025年11月15日(土) 参加人数：12名
- ⑤「陶芸体験！アニマル小皿を作ろう！」 ●2026年1月8日(木) 参加人数：25名 会場：陶芸工作館 講師：三上慶耀氏(日本工芸会)
- ⑥「飛び出すメッセージカードを作ろう！」 ●2026年3月7日(土) 参加人数：8名



新収蔵品紹介(寄贈作品)

神田日勝《広尾海岸(習作)》1969年頃 油彩、ベニヤ板 39.0×76.0cm 【画像1】
以上1点 神田ミサ子氏より寄贈

クスメエリカ《跡形の馬》2025年 インクジェットプリント、アルミフレーム 210.0×280.0cm 【画像2】
以上1点 クスメエリカ氏より寄贈

海老原映《事故現場見取図集》1970年 オフセット印刷、紙 38.7×27.2cm 【画像3】【画像4】
海老原映《事故現場見取図集(号外)》1970年 オフセット印刷、紙 18.8×26.0cm 【画像5】
海老原映《事故現場見取図集(号外)》1970年 オフセット印刷、紙 18.8×26.0cm 【画像6】
以上3点 海老原映氏より寄贈



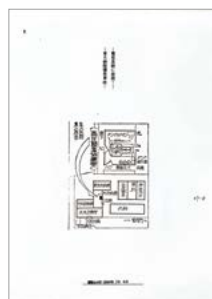
【画像1】



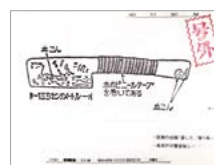
【画像2】



【画像3】



【画像4】



【画像5】



【画像6】



@kandanissho



@kandanissho



「神田日勝記念美術館」で検索

公式サイト <https://kandanissho.com>